

contents

- 1面 最新医療と介護の連携 (1)
- 2面 最新医療と介護の連携 (2)
- 3面 福祉用具の選定
- 4面 ケアマネジメント学会

しにあニュース

「シニア・コミュニティ」ニュース版



- ① 隔月刊「シニア・コミュニティ」ご案内
- 年間購読 7,440円(送料・税込み)
- 1冊購読 1,050円(送料別240円)

体裁 A4変型判
 発行日 奇数月の15日
 発行所 東京都中央区日本橋横山町2-4
 株式会社 ヒューマン・ヘルスケア・システム
 電話:03-5640-2376 FAX:03-5640-2373
 HPアドレス <http://www.hhcs.co.jp/>

すべての認知症が 不治の病と限らない

—— 医療法人社団松弘会 済陽輝久理事長

2008年6月に認知症専門病院「トワーム小江戸病院」が開院して2年。これまで820人の入院患者を受け入れ、うち646人を退院へと導いた。驚異的な数字の背景には、総合病院並みの先端医療機器、リハビリテーションの充実、同法人が運営する三愛病院をはじめとする医療連携にある。済陽輝久理事長へのインタビューをもとに、トワーム小江戸病院の取り組みを紹介する。



トワーム小江戸病院 埼玉県川越市下老袋490-9 TEL049-222-8111 (代表) FAX 049-222-8128



済陽輝久 医師
 医療法人社団松弘会理事長
 わたよう・てるひさ ● 東邦大学
 医学部卒。同大学院整形外科、
 日赤医療センター麻酔科、磯子
 中央病院勤務を経て、1985年
 に三愛病院を設立し、院長に就
 任。97年から現職

し、自治医科大学附属さいたま医療センターの田中裕一教授をスーパーアドバイザーとして病院に迎えている。脳神経外科の専門医である田中教授は、3.0テスラMRIについて、「例えば、従来のMRIでは血管の分岐部なのか動脈瘤なのか不明瞭だった部分が、3.0テスラなら鮮やかに表現されることとなります。3次元の脳血管造影のように鑑別できるとなると、患者さんは造影剤を使用するリスクがなくなります」と語る。

3.0テスラMRIなどの先端医療機器を駆使して早期に病変が発見され、その結果として外科的治療が適切に行われるようになると、脳血管性の認知症においては、回復へと導ける患者が少なからず増えていくかもしれない。それでは、高齢などの理由で、外科的治療が適応できない患者の治療はどうしているのか。

済陽理事長は「治せるものを見逃さないようにしているだけで、診断が確定すると、認知症の治療そのものは大きく変わらないと思います。血管がもろくて手術できない患者さんなどは、食事療法、運動療法、血圧コントロール、動脈硬化予防を丁寧に続けていると、3年目あたりから症状の改善が見られます」と言う。

このほか、トワーム小江戸病院では、今年3月に小腸カプセル内視鏡を導入し、患者の身体的な負担が少ない方法で、虚血性腸炎などの検査を可能にしている。また、薬の副作用で胃腸の働きが弱くなった患者のために、高気圧酸素治療装置も備える。先端医療機器を駆使した検査と治療によって、トワーム小江戸病院は、まさに認知症専門病院の新しい方向性を示しているといえるだろう。

(2面へ続く)

先端機器を完備した認知症専門病院 年内に最新型3.0テスラMRIを導入

医療法人社団松弘会は、埼玉県さいたま市の急性期病院である三愛病院と、同病院内にある県下唯一のガンナイフ治療施設「さいたまガンナイフセンター」を核として、埼玉県南東部の地域医療を担ってきた。トワーム小江戸病院は、松弘会が超高齢社会に対応すべく2006年に相次いで開設した介護老人保健施設「トワーム熊谷」「トワーム指扇」、介護付有料老人ホーム「トワームみずほ台」に続き、2008年6月に埼玉県川越市に開設された。川越市は江戸時代に川越藩の城下町として栄え、小江戸(こえど)の別名を持つ。トワーム小江戸病院の病床数は200床で、認知症専門病院としては国内有数の規模である。

済陽輝久理事長がこの病院を開院したのは、三愛病院で一度かかわりを持った認知症患者を最後まで見届けたいという熱意からだ。

「三愛病院で長く診ていた患者さんが認知症を発症してしまうと、患者さんは介護施設に移ってしまい、病院とのつながりが失われてしまうという現実がありました。また、必要な治療を受けられないまま、患者さんが亡くなってしまふこともありまふ。こうした患者さんを最後まで責任と思ひやりを持って診られるようにしたかったのです」

病院の基本理念は「すべての認知症が不治の病と限らない」というこ

と。認知症患者に対し、現時点で最新の診断と治療、リハビリテーションを実践している。

認知症はアルツハイマー型と脳血管性のものに大別されるが、アルツハイマー型は非常に難病的で、治療で進行を遅らせるしかないという側面がある。その一方で、脳血管性の認知症は、脳の動脈硬化や血流障害などの合併症によって起こるため、早期の脳外科的な処置で回復も期待できる。しかし、痴呆の症状があっても、脳梗塞や脳挫傷などの既往がないという場合には、詳しい検査が行われず、ただ認知症と診断されている場合もありうる。こうした人々を見逃さないためには、「診断」がとても大きな意味を持つてくる。

そのため、トワーム小江戸病院では、総合病院並みの先端医療機器を導入し、合併症の迅速かつ適切な検査を実施している。マルチスライスCT、キセノンCT、外科用イメージ装置、超音波診断装置、消化器内視鏡検査機器(経鼻内視鏡胃カメラ)など、一般的な認知症専門病院では見かけない画像診断装置を完備。年内には最新型3.0テスラMRIも導入する予定だ。この特長について、済陽理事長は次のように話す。

「わずか1ミリ程度の微小出血や脳脊髄液の流れを、きわめてリアルに描出することができます。慢性硬膜下血腫や正常圧水頭症など、ものに

よっては内視鏡で通過障害を取り除きますが、診断の精度が高まることによって、こうした外科的治療がさらに有用になる可能性もあると思います。また、服薬治療の患者さんで、痛みも苦しみもなく、血圧は正常なのに、いつの間にか脳出血している場合があります。これには難しい診断が求められますから、より高精細な画像が重要となります」

3.0テスラMRIは、従来の1.5テスラの2倍の磁場強度を持っており、鮮明な診断画像が得られるだけでなく、より小さな病変を早期に発見できると期待される。特に頭部検査にその威力を発揮するといわれているが、認知症患者は骨粗鬆症や関節疾患などを併発していることも多く、MRIはこうした疾患の診断にも用いられる。心臓の動きもリアルタイムの3次元画像で把握できるので、心機能の評価にも役立てられる。

また、済陽理事長はこの導入に際

トワーム小江戸病院に導入される米国GE社製の最新型3.0テスラMRI。その高精細で高画質な性能は、特に頭部検査に威力を発揮する



リハビリテーションスタッフの充実と チーム医療による手厚い認知症ケア

1985年に開院した三愛病院は、三愛という名前の由来である「患者さんへの思いやりの心」「地域を愛する心」「医療に奉仕する心」の3つの愛を理念としてきた。トワーム小江戸病院にもこの理念は引き継がれており、それは患者を治療するスタッフの充実ぶりにも表れている。

トワーム小江戸病院には、医師18人、看護師60人、看護助手70人など、総勢約190人のスタッフが勤務する。特にリハビリテーション（以下リハビリ）に従事しているスタッフが多く、理学療法士3人、作業療法士7人、言語聴覚士1人、臨床心理士3人が配置されている。済陽理事長の「可能性のあるものはすべて試してみる」という方針のもと、退院を前提にしたプログラムで多彩なリハビリ訓練を実施している。

一般的な認知症専門病院ではほとんど見かけることのない理学療法士の役割は、まず患者を寝たきりにさせておくのではなく、その身体を動かすことに主眼が置かれている。身体を動かせば食欲もわく。認知症に対しては、筋力の低下を防ぎ、昼間活動することによって睡眠障害を改善するという役割も大きい。

作業療法士が中心となって行っているのはドッグセラピーで、トイプードルなど5頭の犬が認知症のケアに貢献している。患者からは笑顔がこぼれ、自分たちよりも小さな存在を愛おしく思う心理的な効果を認知症患者にもたらしているようだ。また、地元の農家の協力で園芸療法も

行われており、農業や園芸などの作業経験者に、驚くほどの機能回復をもたらすこともあるという。

言語聴覚士は、これまでになかった本格的な口腔ケアを病院に持ちこむことになった。作業療法士と協力して嚥下体操も実施し、誤嚥と誤嚥性肺炎を少しでも減らせるように取り組んでいる。

残されている長期記憶を活用する回想療法は、精神科医や臨床心理士など多職種がかかわることになるが、トワーム小江戸病院には、済陽理事長自身の母親が劇的に改善したというエピソードがある。脳出血の後遺症から認知症で入院し、無表情で何の反応も示さない母親に、学生時代の友人からのビデオレターを見せたところ、たちまち笑顔が戻ってきたという。その後、妹と会話をし、歩行訓練を行えるほどに改善している。その様子は、2009年1月にTBS系列の報道番組「NEWS23」で放映され、非常に大きな反響を呼んだそうだ。

また、臨床心理士による認知症のスクリーニング検査も行われている。心理や知能の簡単なテストだが、CTやMRIなどの画像診断だけでは測り切れない患者の心身機能を直接目で見て確認できる。発語がままならない患者にも語りかけ、応答してもらうことでADLを維持する効果もあるという。

さらに、東邦音楽大学と提携し、音楽療法にも取り組んでいる。音楽経験者でもある医療相談員が行って



園芸療法は、植物を育てることで患者の気持ちを安らげ、自信回復につながると考えられている。特にアルツハイマー型の認知症患者に対しては、頭を活性化させるのに園芸作業が有効だという報告もある。トワーム小江戸病院では、庭園管理士が日常の農園の管理を行っている

ストレスを感じさせない くつろぎと安らぎの空間



穏やかな陽光が射しこむエントランスホール

いるが、精神賦活効果のほか、発語の訓練、回想療法的手段としても有効なセッションとなっている。

スタッフが日常的に認知症ケアに取り組んでいる病院の建物と家具は、高級感のあるホテル仕様となっており、くつろぎと安らぎが波及されている。認知症専門病院は精神科病院であるために、入院や通院に抵抗を感じる患者や家族は多い。そこで、トワーム小江戸病院では、屋上からの吹き抜けや玄関前の緑の芝生など、明るく広々とした空間を実現し、従来の精神科病院の閉鎖的なイメージを払拭させている。

院内は1階に外来と認知症デイケアがあり、3～6階が入院病棟となっている。認知症患者の性質として、少ない人数での生活の方が、問題行

動を減らせるという傾向にある。そこで、入院患者は小グループでケアすべきとの観点から、各階の病棟はさらに4つのブロックに分けた「ユニットケア方式」を採用。各ユニットで日常の生活が完結できるようになっており、各ユニットを見渡せる中央にナースステーションを配し、十分な見守りを可能にしている。

3階と4階は認知症と合併症を治療する病棟で、5階と6階では認知症の治療が中心に行われる。勤務する看護師によると、「家族が今困っているなら今助けてあげなさい」という済陽理事長の方針で、他の病院では治療を断られることも多い高齢者を積極的に受け入れる。そして、徹底的な検査を重ねて合併症を治療していく。そこが他の病院には見られない大きな違いだという。

総合病院並みに完備された先端医療機器と、リハビリスタッフの充実ぶりに象徴される手厚いチーム医療。2008年6月1日の開院から2010年5月31日までの2年間で、トワーム小江戸病院の入院患者総数は延べ820人。退院患者総数は646人で、さらに自宅へと戻ることができた患者は126人と、延命処置を行わないホスピスと化している認知症専門病院が多いなか、異例ともいえる成績を残している。トワーム小江戸病院のこの驚くべき成績は、ともすれば医療従事者側の苦勞も絶えない認知症治療に対し、済陽理事長をはじめとするスタッフ全員の熱意が注がれた結果である。



ドッグセラピーで活躍中のトイプードル
(左から)メープルちゃん、シフォンちゃん、タルトちゃん

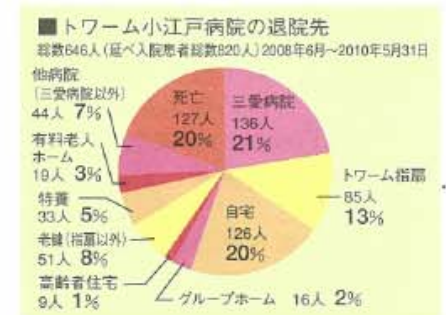
三愛病院をはじめとする医療連携で認知症治療に期待

医療法人社団松弘会の三愛病院は、1985年の開院以来、24時間の救急医療体制を維持するなど、地域の急性期病院としての役割を果たしてきた。済陽理事長の専門分野である整形外科は、特に脊椎脊髄疾患に対する低侵襲手術への取り組みなどで広く知られている。2004年には、埼玉県唯一のガンマナイフセンターを開院したことで

も注目された。2008年に開院したトワーム小江戸病院が、認知症専門病院でありながら合併症の治療に取り組めるのは、この三愛病院の存在も大きいと思われる。トワーム小江戸病院で対応できない疾患が見つかったら、同じ松弘会の三愛病院、あるいは自治医科大学附属さいたま医療センターなどの協力機関へ

と、症状に合わせて患者をすみやかに転院させられる医療連携体制が整っている。これとは逆に、トワーム小江戸病院の入院患者は、三愛病院からの紹介も多く、さらには松弘会グループの介護老人保健施設からも入院している。

松弘会が2006年に開設した介護老人保健施設には「トワーム熊谷」「トワーム指扇」があり、三愛病院の名前の由来である3つの愛の理念を受け継ぎながら、入所サービス、短期入所サービス、通所リハビリテーションを提供している。また、同年に開設した介護付有料老人ホーム「トワームみずほ台」は、自然に囲まれた埼玉県富士見市にあり、ゆったりと時を過ごせる環境が整えられている。



超高齢社会を迎え、合併症を抱えた認知症患者への対応は今後ますます重要になってくる。一見関連がないように思える急性期病院と認知症専門病院の連携により、松弘会は認知症治療に大きな成果を上げている。すべての認知症が不治の病と限らない。三愛病院とトワーム小江戸病院の医療連携が、認知症治療における新しい手本となることを期待したい。



三愛病院



トワーム指扇